

まちの小さな農園がもたらす シニア男性の居場所と役割

— 豊中市社会福祉協議会「豊中めぐり」プロジェクト

インタビュー

勝部麗子

「社会福祉法人豊中市社会福祉協議会事務局長」



脇坂敦史 | 取材・執筆
宮村政徳 | 撮影

高齢世帯や単身世帯が多数を占め、ひとり親世帯も急増するなか、地域では子どもの貧困や中高年の引きこもりなど、周囲が察知しにくい社会的孤立も進行している。そうした多様な課題解決に対し、期待されるのが住民相互の支え合いによる新たな地域の編み直しと、拠点としての空き地・空き家の活用だ。

そんななか、大阪府豊中市で展開する「豊中めぐり」は、空き地を利用した都市型農園事業により、居場所のない退職後のシニア男性の社会参加を促進。それを核に、重層的で力強くユニークなソーシャルデザインが注目を集めている。同事業の中心を担う豊中市社会福祉協議会の勝部麗子さんにお話を伺った。

地方なら当たり前のように存在する畑や田んぼも、都市部では希少だ。千里ニュータウンに代表される団地、マンション、社宅や一戸建て住宅など、宅地化が早く進んだ大阪北部のベッドタウンである豊中市はその典型だろう。ここでは、土をいじり、そのおいを日常的に嗅ぎながら暮らす「贅沢」は、誰もが味わえるものではない。毎朝電車で都会に通勤するライフスタイルを終えたシニア男性の多くも、土とは無縁の人生を送ってきた。

豊中市社会福祉協議会が開設する都市型農園「豊中めぐり」プロジェクトは、そんな60歳以上のシニア男性のみ約150人を会員とする。同プロジェクトにとって最初の農園である「岡

町菜園（380㎡）」を訪れた印象は、宅地に囲まれたちょっとしたオアシスといったところ。農地や畑というより、むしろ都会的な公園のような印象だ。白菜や大根、人参、レタスといった野菜が収穫を待ち、芽を出したホウレンソウの鮮やかな色も美しい。畝のまわりをレンガで敷き詰めた「ユニバーサル農園」のスマートで明るいスタイリッシュな景観もあり、集う人びとの様子に「農作業」の重さやしんどさはない。と、老いて土と向き合う孤独な時間かという点、それとも違う和気藹々とした楽しさにあふれている。

「廃棄されるレンガ約6000個をもらい、半年かけて敷き詰めました。車椅子の方や、小さな子どもでも農作業に参加できるんです。これだけの人数で手をかけ、肥料には学校などから出た生ゴミ由来の堆肥をたっぷり使う。ものすごく贅沢で、過保護な畑ですよ」

そう笑顔で説明されるのは「豊中めぐり」の生みの親である勝部麗子さん。農園ができた2016年まで、ここは阪神・淡路大震災で被害を受けた建物を取り壊された後、二十数年も放置されてきた土地だったという。緑のある方から「福祉のために利用してほしい」と声をかけてもらい、以前から温めていたシニア向け農園のアイデアを実現させることにしたそうだ。「市民農園のように、毎日ひとりでやる農業ではありません。ここには毎週一回の共同作業日のほか、当番制もあるし、力仕事が得意な人とそうでない人との分業もある。農園での作業のほか、広報活動や販売など、それぞれ得意の分野を生かして協力し合っています」

集まるための目的や趣旨、 成果を求めるシニア男性たち

勝部さんの言う「贅沢」や「過保護」とは、



上・中／運び込まれた廃棄レンガを、全員の共同作業で敷き詰めるなか、メンバーの協力意識は生まれていった。下／お話をしてくださった勝部さんとメンバーの皆さん。地元アーティストのデザインをもとに、子どもたちも参加して描いたという壁画の前で。上・中／写真提供／豊中市社会福祉協議会

お金がかかっているという意味ではない。むしろお金は使わず、たくさんの人たちが知恵と工夫を出し合う。自分たちの能力を出し惜しみせず、小さな土地に注ぎ込む。そもそも、この「贅沢な農園」が第一に目指すのは、農作業それ自体や収穫物だけではないのだ。

「もともと豊中市では小学校区ごとに子どもや高齢者に対する『見守り活動』を展開してきましたが、担い手となるボランティアはどうしても女性中心という課題がありました。団塊の世代が大量に退職する2007年頃から、男性を集めての料理教室など工夫をしてイベントや講座を開催しましたが、その時だけ参加して、おしまいになってしまう。なんでやる？と思いがちで、やはり毎日行ける場所がないからだと気づきました。しかも、女性は集まること自体を目的にできるタイプの人が多いのに対して、男性は集まるための目的や趣旨があり、目に見えて成果が出ることにやり甲斐を感じる傾向が強いんです」

地域のなかで孤立しがちな男性たちの居場所をつくり、定年後のシニア男性にも「見守り活動」を含め地域福祉を担う力になってほしい。そんな大きな目標をもつ農園にとって、「贅沢さ」ははむしろ必要不可欠なポイントであったのだと腑に落ちる。

2018年に世界初の「孤独担当大臣」を置いたイギリスでは、「メンズ・シェッド（男たちの小屋）」というDIYに取り組むための場所

をつくったという。「ものづくりという発想は同じだけれど、特にこの町では農地がものすごく希少なので、畑で野菜をつくるという憧れを皆で共有する価値が高いと考えました」と語る勝部さんが思い当たったのは、自らが東日本大震災のボランティア活動で得た「第1次産業の強い地域では、高齢者にも居場所がある」という実感。こうして「農業を通じた介護予防」をうたう「豊中あぐり」は産声をあげた。

「とはいえ、最初は管理の行き届かない市民農園のようなものを想像する人が多かったと思います。周辺住民からは臭いや景観の悪化を心配する声も聞かれ、不特定多数の人が出入りする農園をつくることに反対があったのも事実です。そういった声にも協議会として一つひとつ丁寧に耳を傾け、対話を重ねました。結果、完成した農園を見て気に入ってくれた方も多く、今ではイベントなどで積極的に声をかけてくださるご近所さんが増えています」

DIYを通じて生まれた「シニア男性の当事者組織」

もちろん経験ゼロの退職シニアがすぐ成果を出せるほど、農業は甘くない。それに、最初からスムーズな共同作業が自然に生まれたわけでもない。まず、勝部さんを驚かせたのは、社勤めの長い彼らに深く根づいた「競争原理」だった。「農園で何を育て、何を植えるのか？」それを話し合っただけで決めてほしいと伝えても、ま

とまらない。あげく「一人ひとり数十mずつ区画を分け、好きなものを植えるのが一番効率が高い」といった意見まで出る始末。目指すべき地域における「助け合い」の価値観とは、ほど遠い状態にあったという。

しかし、状況は理念よりも具体的な作業、目の前の仕事を通じて打開される。農園開設の当初から参加するメンバーの戸谷友隆さん(80歳)も、「いきなりトラック何台分ものレンガが運ばれてきて、これを敷きますというところから協力が始まりました。話し合うよりも先に、とにかく一緒にやるしかなかった。でも、それがよかったのかもしれない」と苦笑する。

企業においては、いろいろな形でものづくりに携わってきた人の多い世代だ。何かをつくるとか、イベントを開催するとなれば、必ず得意分野をもった人たちがいて、さまざまな力を発揮してくれる。それを互いに認め合うことで関係が生まれ、一人ひとりの役割が見つかり、どんどん居場所ができていった。戸谷さんは「それでも現在、豊中市の全人口に65歳以上の男性が占める割合は11%の4万4000人で、仲間はいくらでも増やせるし、増やしてほしいですね」と将来へ期待をふくらませる。

自宅ポストに投函されていたチラシを見て、健康維持を目的になんとなく参加したという池田雅美さん(82歳)も、「豊中あぐり」に居場所を見つけたひとり。今はこの場所で、多くの人と関係ができたことに感謝している。

基本をおろそかにしては、福祉の担い手のための理想の農園ができるはずもない。

畑を起点に重層的に広がる地域のネットワークづくり

「豊中あぐり」の活動は、いかに地域をつなげる福祉と関係し、広がっていくのだろうか？詳細をあらためて紹介しながら、その重層的で多面的な働きを探ってみよう。

たとえば収穫した野菜は、専用の移動販売車で売りに行く。ただし、お年寄りの集まるサロンなど福祉関係のつながりのある場所で、あらかじめ告知をして行う。そのため、お客さんを待つてぼんやり一日を過ごすというような「商売の厳しさ」とは無縁なうえ、常連のお客さんと交流しながら地域の住民との関係を築き、その暮らしに変わりがいか「見守り」を行うという、別の重要な役割をも担うことになる。

ほかにも、できた野菜を地域の子ども食堂で食べてもらい、集まる子どもたちと一緒に畑で収穫祭も行う。田植えや収穫など、都会育ちで土に触れた経験のない子どもたちに、田んぼや畑で楽しく遊んでもらう機会もつくる。それら流通や活用過程には、地域の引きこもりの若者の就業機会を生む効果もあるという。こうした活動を通し、メンバーは地域の福祉ネットワークとも自然につながっていきけるのだ。

「公的な福祉のつながりには限界があり、どうしても助ける側と助けられる側の壁が生まれが

「ことにコロナ禍になってから、それを実感しています。家にずっといたら、ひたすらテレビを見ているだけの毎日だったかもしれない。家族の介護など、なかなか相談できないことも話し合える。そういう仲間がいることで、皆が互いに助け、助けられています」

仲間づくりの場としての農園。それを勝部さんは、「シニア男性の当事者組織」と表現する。「ある年齢以上になると、誰もが介護の当事者になります。でもこの世代の男性の多くは、息子や娘にも弱音を吐けない人たち。大丈夫じゃないのに大丈夫と言ってしまう。たとえば、要介護の妻のおむつはどう当てるのかとか、下着はどこへ買いに行けばいいのとか……。聞きたくても、聞けないことばかりなんです」

支え、支えられる「土壌」としてのCSWの方法論

まちなかにシニア向けの農園をつくり、地域の福祉を活性化させる。もちろん、それは「魔法の杖」ではない。だが、「豊中あぐり」の試みが成功しつつある豊中市から、私たちが学ぶべきポイントは多そうだ。それを成功させた「土壌」は、どのようにつくられてきたのだろうか。豊中市社会福祉協議会が組織したボランティアによる「見守り活動」で大きな課題となったのは、「解決する側」を担うべき行政の縦割り組織だった。いわく、63歳は「高齢者」ではない。成人男性の引きこもりは、子どもではない。外

ちです。でも、食べ物を通じた関係には、それがあります。土から収穫したものを素直に分け合っただけで喜ぶことができる。原価がいくらというお金の計算を超えた感覚があると思います。それが、野菜のもつ優しさ。食べることで困窮者も、認知症の人も、子どもたちも、外国人もつながる。すごい力ですね」

「豊中あぐり」では、収穫したサツマイモを使った焼酎づくり、ジャガイモを使ったコロッケづくり、トマトジャムづくり、シークワサーを使ったビールづくりなど、「6次産業化」【*1】



右／菜園や果樹園で栽培したサツマイモの焼酎、シークワサーが入ったビール。左／収穫した野菜は直売や子ども食堂への提供のほか、「大阪空港カリー」の具材やオリジナルの「豊中あぐりコロッケ」の材料にも。左／写真提供／豊中市社会福祉協議会

にも取り組む。そのほか、子どもたちと一緒に案山子づくりや凧あげに挑戦したり、流しそめんや餅つき大会で地域交流を深めたり、北限のバナナ栽培に取り組んだり、面白そうなことにはなんでもチャレンジする。勝部さんの言葉を借りれば、「ここはまさに「ラボ」であり、「遊び場」なのだ。畑にやって来て同世代と交流し、自分のやりたいと思ったことをやる。それが、地域の人びとへとつながっていく「自然な回路」となっているのだ。

**潜在的な「空き地」は
さまざまな場所に見つかる**

参加者の得意なこと、やりたいことに合わせて活動内容も変わる。畑も、有志の方が提供してくれた土地を借りる場合が多く、相続などの行方で今は使えなくなる可能性もある。事情に合わせて、あるものを生かしながら変幻自在に姿を変えていく。そんな「豊中あぐり」は現在、市内の8カ所に点在し(表)、岡町では空き家利用の地域共生ホーム「和居輪居」も交流や催しの拠点としておおいに活用されている。

「岡町菜園」のように個人の宅地を借りた、いわゆる「空き地」のほか、大阪国際空港の管理会社から借りたという空港隣接の比較的広い遊休地(750㎡)もある。2021年には、宅地ではなく個人の農地を借りて体験型の「豊中あぐりパーク(1000㎡)」も開設した。これは豊中市の都市農業振興基本計画を改定するこ

表: 令和5年現在「豊中あぐり」は8カ所で活動中

1	岡町菜園 2016年4月	個人の宅地	380㎡	ユニバーサル菜園として、研修、イベント、野菜作りの勉強会などに利用
2	原田菜園 2017年5月	空港管理会社の所有	750㎡	米、芋、玉ねぎなど、本格的な野菜の栽培
3	千里ガーデン 2018年3月	有料老人ホーム	100㎡	屋上菜園として入居者とのコミュニケーションをとりながら栽培、販売を実施
4	岡町第二菜園 2019年4月	個人の宅地	250㎡	畑として土づくりからスタート、近所の方、特に子どもたちとの共同菜園として、スイカ、キュウリなど夏野菜のほか、北限のバナナ栽培にも挑戦中
5	庄本あぐり 2019年4月	施設の屋上	40㎡	プランターを使った屋上菜園、ゴーヤ、トマト、ナスなどの夏野菜を栽培
6	加納ファーム 2019年10月	個人の宅地	140㎡	葉物野菜を中心に栽培
7	清豊苑果樹園 2020年10月	老人ホーム		シークワサーなどの柑橘系の果樹園
8	豊中あぐりパーク 2021年4月	個人の宅地	1,000㎡	豊中市都市農業振興基本計画の改定により初めて農地を借用、体験型農園としてレンゲ畑やひまわり迷路など計画

が、目をこらせば、都会にも意外なほど多くの空き地は存在する。管理が行き届かず、うまく利用できていない土地を見つければ、難しくないことに気づく。土地をめぐる人びとの思いや希望もお金だけでなく、たとえば思い入れのある土地を手放すことに躊躇していたり、何かの形で地域に貢献したり、関係をもちたいと思っている空き地・空き家の所有者は、意外に

いるものだ。勝部さんは指摘する。「あまり使われていない小さな公園とか、団地の空き地などにも大きな可能性があると思っています。ただ、関係者と話してみると、多くの人が農園はいいアイデアだと賛成してくれる



上/空き家利用の活動拠点「和居輪居」での朝市。中/「動くマルシェ」号による地域集会所での販売と安否確認。下/豊中あぐりパークでの「ひまわり畑であそぼう」には、さまざまな事情から外で遊べない子どもたちや引きこもりの若者が多数参加した。写真提供/豊中市社会福祉協議会

とで初めて実現したものであり、大都市に残る農地をいかに活用し、どう管理するべきかを考える貴重なモデルケースとなるはずだ。そしてもうひとつ、注目すべきは有料老人ホームの屋上庭園などを利用したケースだろう。こうした小さなスペースは、もともと入居者の楽しみや美観のために設けられたものの、管理委託の費用がかさみ、経営の重荷となっていることも珍しくない。こうした場所も「豊中あぐり」のメンバーが農作業を行うことで、手入れも行き届き、入居者には収穫した野菜を食べてもらおうといった交流が進むなど、好循環が生まれている。その点、同じ市内の高齢者に仕事をしてもらったとしても、畑の管理だけを依頼する派遣労働との違いは明らかだ。

ものの、収穫した野菜は誰の所有になるの？誰が責任をもつことになるの？といった細かい点を解決できなかったりする場合もあります。同じようなことを行政主導でやろうとした場合にも、土地の取得や賃貸契約も含め、実は高いハードルがいくつもあつた。「豊中あぐり」同様、社会福祉協議会のような非営利の民間組織が会員を募り、自由でフレキシブルな運営を行うことで、収穫した野菜の行き先が象徴するような問題にも柔軟に対処できる余地は大きいだろう。その意味で、会社組織をつくり、収益構造をしっかりと設計するというよりも、人々とのつながりを目的に、生み出される恵みを皆に還元することが大切だ、と勝部さんは考えている。

「収益性を重んじ、年金生活者にとって少しでも生活の足しになれば」という発想は、一見よさそうですが、実はあまりうまくいきません。労働としての農業はやってみると甘くないし、しんどいものです。人生の最初は学生、その後の何十年間を会社員として過ごした都会のシニア男性にとって、誰かの考えた方針に従って無理に頑張る、成果を出すような活動は、もう十分なのではないか、と思います。ボランティアとして自分のやりたいことを探し、新しい社会を仲間と共につくる結果として人の役に立てる。ぜひ、それに挑戦してほしいんです」

人と人がつながるための場所や仕組みを語るとき、勝部さんは「コモンズ(共同空間)」とい

こうした視点から、勝部さんが今、特に注目しているのは小中学校にある花壇だという。もともと管理を担っていた教師たちが過重労働により十分な時間をとれず、放置されて雑草だらけになっている場所も多い。豊中市内の学校では、すでに6カ所で野菜づくりが始まっているが、近所に住むシニアが手を入れ、さらに授業や課外学習で子どもたちに野菜づくりを教えられれば、一石何鳥も期待できる。

**地域の輪を再び結び直す
糸口としてのコモンズ**

土地そのものが大きな経済的価値をもつ都市部で、「豊中あぐり」のように福祉目的で新たな農園を開設することは、むろん簡単ではない。言葉を使う。英語の commons は、いわば誰も所有しない土地。日本で言う「入会地」*1のように共同体の皆で使う場所だ。「集まっつながら、ということを今の社会はほとんどなくしています。買物だって、ネットで注文すれば玄関まで届けてくれる時代。町の清掃活動も、今は業者に任せることが多いでしょう？ それとはあえて逆のものをつくろう、というのがコモンズとしての畑なんです」

メンバーたちが「ちっぴけな農園ですが、日本一楽しい農園」と胸を張る「豊中あぐり」。まちなかの小さな農地が、作物はもちろん地域の間関係の輪も生み出すコモンズへと変わっていく。それを実現させたのは、人と人を地道につなげることの積み重ねだった。今、あらためて社会を結び直す「糸口」としての空き地・空き家の可能性は決して小さくないだろう。

注 *1 1次産業の従事者(農林漁業者)が、農産物等の生産だけでなく、2次産業(製造・加工)と3次産業(サービス業・販売)にも取り組み、生産物の価値をさらに高めることを目指す動き。
*2 一定の地域の住民が共同で利用する、特定の土地や森、漁場。



勝部麗子(かたべ れいこ)
社会福祉法人豊中市社会福祉協議会事務局長、コミュニティソーシャルワーカー。大阪府豊中市生まれ。1987年に豊中市社会福祉協議会に入職。2004年、地域福祉計画を市と共同で作成。全国で第一号のコミュニティソーシャルワーカーになる。その後、一貫してCSWの手法を通じて、地域住民の力を集めながら数々の先進的取り組みに挑戦。その活動は、府や国の地域福祉のモデルとして拡大展開されてきた。NHKドラマ「イレント・プア」の主人公のモデルであり、「プロフェッショナル 仕事の流儀」にも出演。著書に「ひとりぼっちをつくらない コミュニティソーシャルワーカーの仕事」全国社会福祉協議会がある。